慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルサス人口論に現はれた南海諸島
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.4 (1942. 4) ,p.314(44)- 339(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19420401-0044
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420401-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルサス人口論に現はれた南海諸島

寺尾琢磨

目次

序
一、マルサス人口論の初版と二版
二、マルサスに於ける島嶼研究の意義
三、南海諸島發見の略史
四、マルサス人口論に現はれた南海諸島
五、マルサスの一般的結論

序

昨年私はマルサス人口論の改譯を上梓することが出來た。改譯の筆を進めてゆく間に、私は南洋諸島に關する種々の文章に遭遇したが、そのときは、何れも我々に緣の遠い別の世界のことゝしか考へなかつた。然るに大東亞戰爭の勃發し、皇軍の威武南方に振ふに及んで、模糊たるこれら幻想も俄かに明白な現實として我々の前に浮び上つた。その多くは既に皇軍に占據され、殘るものも逐時わが制壓下に置かれんとしてゐる。雄渾なる新東亞建設の構想は、南溟全域を隅なく覆ひ、その實現も今や時間の問題でしかなくなつた。惟ふに開發の事業は、これら地方に對する多角的徹底的なる研究と調査に立脚せざるを得ない。フィリッピン、ジャヴァ又は濠洲の一部の如きに於ては、從來の支配者の手になる資料も極めて多いと聞く。その散佚を防止し利用を圖ることは、緊急の要事であらう。同時に、今なほ原始林に覆はれ千古の秘密に閉されてゐる地方に關しては、我々の手によつて新たに大規模な調査が行はれねばならぬ。既に幾つかの調査班は占領地帶に活動を開始したが、作戰の進展と共に、その範圍は一路擴大されるであらう。それは戰爭目的完遂の不可缺的要件でもある。

本稿で取扱つたものは、マルサスの人口論に現はれた往時の南洋事情である。本文に記した通り、これら地方の發見は略々マルサス以前に於て一應終了したと言へるが、それは單なる發見に止まり、調査と稱すべきものではなかつた。故にマルサスの利用し得たものは、調査報告ではなくて、極めて表面的な紀行記乃至は印象記に過ぎない。それは謂はゞ一ケの物語を出でず、いま改めてこれを採り上げる價値は無いとも思はれるが、これらの舊態を今日の狀態と比較するならば、歐洲人との接觸が原住民に何物を齎したかを知る一つの緣ともなるであらう。

一、マルサス人口論の初版と二版

一七九八年出版の匿名者による「人口の原理に關する一論——ゴドヰン氏コンドルセー氏その他諸家の研究に觸れて、社會將來の改善に對する影響を論ず」（An Essay on the Principle of Population, as it affects the future improvement of society, with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet and other writers.）は、當時の歐洲諸國を風靡した極端な理想主義と樂觀主義に對する痛烈な批判として、忽ち世人の注目の的となり、筆

者の何人たるかはその年のうちに一般に知れ渡つてしまつた。社會に蔓る貧困と悲慘は、總べて劣惡なる人爲の諸制度の產物であり、從つて人間がこれより解放されて總べて理性の導くがまゝに行動するに至るならば、將來の幸福と豐富は期して俟つべく、人の生命すら殆ど無限に延長されるといふゴトキン流の主張を、若いロバート・マルサスは嚴酷な人口原則に據つて正面から粉碎したのである。

併しマルサスは初版の成功を以て滿足はしなかつた。それは、即興的に、且つ田舍に在つて當時彼の利用し得た僅かの材料に基いて畫かれたもので、論旨自體が未熟たるのみでなく、「著者の主張全體を說明するために、もつと澤山事實を集めることが出來たならば、疑ひもなくこの論文は、もつと完全なものになつたに相違ない」からである。斯くて彼は爾後の時日をその改稿に獻げんとし、そのために一方では尨大なる文獻を涉獵すると共に數名の友人を伴つて大陸に渡り、獨逸・瑞典・那威・フィンランド及び露西亞の一部を歷訪して、資料の蒐集に努めた。それらの結果は、一八〇三年の第二版となつて現はれた。この第二版は、「新著と見做してもよい」ほど初版と體裁及び內容を異にしてゐる。即ち第一には、匿名を棄てゝ著名の名を明かにし、第二には、歷史的例證を豐富に引用することによつて著しく分量を增加し、第三には、所謂道德的抑制なるものを認めることによつて初版の最も苛酷な結論の一部を緩和せんと努めたことで、第四には、表題そのものも「人口原則に關する一論——人類の幸福に及ぼす其の過去及び現在の影響の考案、併せてそれが惹起する弊害の將來の除去又は緩和に關する吾人の見込に就ての研究」（An Essay on the Principle of Population, or view of its past and present effects on human happiness, with an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions.）と改められた。後に一八〇六年、一八〇七年及び一八一七年及び一八二六年にそれぞれ三版、四版、五版及び六版が出版され、その都度多少の改訂增補が加へられたが、實質的には殆ど變化は認められない。

さて初版と第二版との間のこれら相違點のうち、理論上最も重要なるものは、言ふまでもなく道德的抑制の導入である。初版の結論は「人口增加といふ優勢な力を制限すれば、そこには必ず窮乏と惡德とが生れる。人生の盃に於けるこの苦味一齧と、之を生ぜしむるに至つたと思はれる物理的諸原因の永續については、吾等はそれを疑ふべく、あまりに有力なる證據を有ち過ぎてゐる」といふことであつて、この見解を採る限りは、「社會の下層階級の間に蔓る貧乏と困窮とは、全く治療し得べからざるものであることを承認する外なきもの」である。然るに罪惡にも困窮にも非ざる道德的抑制を認めることによつて、今や社會改善に關する新たな希望が生れたのである。彼が第二版を以て新著と見做してもよいと考へた主たる理由は此處に在るのであらう。

併しこれと共に第二版をして根本的に初版と區別せしめるものは、その豐富なる歷史的例證である。初版は殆ど抽象的論據を以て終始し、そこには事實の背景は極めて乏しかつた。併し彼の言ふが如く、「そこに提出した主要原則は全く議論の餘地なきものであるから、若し單に概論を述べるに止めたならば、自己の四邊を圍らすに難攻不落の要塞を以てし得たであらう。そして斯かる體裁を以てしたならば、本書は恐らく遙かに堂々たる外觀を具へたであらう。併し斯かる概論は、たとへ抽象的眞理の要點を闡明する事は出來るとしても、何等かの實際的效果を促進する傾きは殆ど無い」のである。即ち彼にとつては、今や人口原則をば歷史的事實によつて證明する必要に迫られたわけであつて、第二版の前半は總べてこの要請より執筆されたのである。この前半は、世界の文化劣れる地方並びに過去の時代に於ける事情を述べた第一編と、近代の歐羅巴諸國に於ける事情を記した第二編とから成つてゐる。そしてその結論に於て曰く、「第二編に於て考察し來つた社會狀態を、第一編の主題を成した社會狀態と比較すれば、

近代歐羅巴に於ては、過去の時代に比し、また世界の文化劣れる地方に比し、人口に對する積極的障碍はよし少く、豫防的障碍はより大なることが判る」と。

二、マルサスに於ける島嶼研究の意義

マルサスが文化劣れる地方を考察した目的は、上述の如く、人々に對する積極的障碍の普及を立證せんがためであつた。積極的障碍は、「その罪惡より生ずると困窮より生ずるとを問はず、人間の天壽を短縮せしめるに多少とも關係ある一切の原因を包含する。故に此の項目の下には、一切の非衛生的なる職業、過激の勞働と寒暑への曝露、極度の貧困、小兒の榮養不良、大都會、凡ゆる種類の不攝生、普通の疾病と流行病の全部、戰爭、疫病、及び飢饉等を數へることが出來る。」これらのうちの或るものは、文明國に於てより優勢なるものもありうるが、その多くが未開國に於て遙かに優位を保つことは、容易に想像しうるところである。即ち第二版以降の第一編に現はれた社會狀態が概して不快なる敍述に溢れてゐることは當然であつて、特に未開蒙昧なる民族に關する諸章に於て、この感は別して深いのである。

併しマルサスが特に幾多の島嶼をとり上げたについては、次の如き事情もある。即ち彼は第五章の冒頭に於て次の如く論じてゐる。「レイナール師はブリテン諸島及び島民一般の古代の狀態を論じて次の如く言つた。人口增加を阻害する幾多の奇習は、是等島民に源を發した。食人、男子の去勢、女子の陰部箝制、處女性の奉獻、獨身の讃美、餘りに若く母となつた娘に對する懲罰等即ち是である、云々。次で師は、島嶼の人口過剩に基く斯かる風習は諸大陸に傳播し、其處では現代の哲學者が今猶ほその理由に頭を惱ましてゐる、と論じた。師は敵に包圍されてゐる亞米利加の蠻族や、又は同一狀態に在る他國に圍繞されてゐる之等繁華な國民等が、幾多の點に於て島民と同じ境遇にあることには氣がつかなかつたらしい。大陸に於ては、島嶼に較べて、人口增加に對する障碍は餘りに明瞭でなく、且つ餘り普通の觀察には映り難いが、而も依然克服し難い妨害となり、母國に於て感ずる懊惱に堪へ兼ねて出奔する移住民と雖も、必ずしも他國に於て安住の地を發見し得る望みは無いのである。既知の島嶼にして其の產物を更に增加し得ないやうなものは恐らく未だ無いであらう。此の事は地球全體に就ても正に然りである。兩者は何れも其の現在の產物の限度迄の人口を擁してゐる。そしてこの點に於て、地球全體は島嶼のやうなものである。併し島嶼に於ては——就中其の狹小な場合には——人口の限界は極めて狹隘であり極めて明白であるから、何人と雖も之を目睹し認知せざるを得ない。故に、最も確實な情報の具はつてゐる島嶼の人口に對する障碍を研究することは、現在の主題を例證するに大いに資するものがあらう。船長グックの第一航海記には、新和蘭の分布稀薄なる蠻人に就て、「如何なる手段に依り、此の國の住民は、國土の給養し得る員數にまで減少せるか」との質問が發せられてゐるが、此の質問は直ちに移して南洋の最も人口稠密な島嶼或ひは歐羅巴及び亞細亞の最も繁華な諸國にも適用することが出來る」云々。即ち比較的狹小なる地域の觀察が、この問題の例證として特に適當なることを主張して居るのであつて、この見解は、例へば第二編第一章の末尾にも次の如く述べられてゐる。「惟ふに諸國は、歐洲に於て、旅行家が人口過剩に關する何等かの憂慮を耳にする恐らく唯一の國であり、又下層階級の幸福が此の原因に依つて脅かされる危險が或る程度まで着目され理解されてゐる恐らく唯一の國である。是は明かに、全人口が尠く、延いて其の問題の範圍が狹小なために生じたのである。今假りに吾人の注意が一箇の教區に限定され、且つこの教區より移住力は全くないものとするならば、如何に輕率な觀察者も、若し何人も二十歳で結婚するならば、農業者は彼が如何に愼重に土地を改良しても、子供達に充分の職業と食物とを與へることの完全に不可能なる所以を看過

する筈はないであらう。併し人口稠密なる國に於て斯かる教區を多數綜合する時は、問題は廣汎となり、且つ人の移動は容易となり、之がために吾人の觀察は昏迷し當惑する。斯くて吾人は從來火を睹る如く明かであつた眞理を見失ひ、不合理にも一國全體は、その各部分の總計よりも遙かに大なる人口を支持する力を有するもの〻如く解釋するに至るのである」と。即ちこの見地からすれば、孤立せる島嶼の研究は、彼にとつては特別の意義を有することが判るのである。

三、南海諸島發見の略史

過去及び現在の事實に照して人口原則を立證ぜんとするマルサスの意圖は、その第二版に具體的に示されたが、その際利用された資料は、大部分は先人の手に成る文書又は統計數字である。彼自身、既述の如く、大陸に渡つて直接の觀察を行つたことはあるが、旅行の範圍も期間も極めて僅かで、特に調査と稱しうるが如きものを行つた形跡はない。即ち彼の謂ふ事實とは、主として文獻的知識であつて、第二版序文には、餘暇を割いて、人口原則が過去及び現在の社會狀態に及ぼす影響に關する文書を渉獵した、と明記されてゐる。兎に角、歐羅巴の一部を歷訪したに過ぎない彼が、殆ど全世界各地に亘る狀態を記述するに當つて、文獻のみを唯一の頼りとしたのは當然である。併し遠隔地及び未開國に關する知識は、彼の時代にあつては、素より未だ極めて貧弱であつて、從つてこれら地方に關するマルサスの敍述は、單に斯かる地方の未開狀態を傳へるに止まらず、實に當時に於ける西歐人の斯かる地方に關する知識の未開狀態を物語る所以でもある。

マルサスは殆ど全世界に論及してゐるから、その記事のうちに東亞に關する部分の少からざることは毫も奇とするに足らない。特にペルシャ、印度、支那については可成りの頁を割いてゐる。併し日本、濠洲及び南海諸島については、いはゞ斷片的印象記が轉載されたに止まり、今日から見れば、單なる物語的興味を出でないと思はれる。いま南方に關する彼の敍述に現はれた島嶼を擧げれば、次の如くである。ティエルラ・デル・フエゴ（Tierra del Fuego）・ヴァン・ディーメンス・ランド（Van Diemens land）、アンダマン諸島（The Andamans）、ニュー・ホランド（New Holland）、ニュー・ブリテン（New Britain）、ニュー・ギニア（New Guinea）、ニュー・カレドニア（New Caledonia）、ニュー・ヘブライド（New Hebrides）、ニュー・ジーランド（New Zealand）、オタヒート島（Otaheite）、ソサイエティー諸島（Society Islands）、フレンドリー諸島（Friendly Islands）、マルケサス諸島（Marquesas Islands）、サンドウイッチ諸島（Sandwich Islands）、イースター島（Easter Island）、マリアナ群島（Mariamna Islands）、等。これら島々が何日の時代に何人によつて發見されたかは、興味ある題目であらう、

「南方の何處かに存在する未知の大陸」（Terra Australis incognito）、恐くはプトレミーの時代から歐洲人の腦裡に描かれたこの空想の大陸に到達せんとする野望こそ、幾百幾千の航海者達をして、幾百年の長きに亘つて、涯しなき南大平洋の海面を彷徨せしめた主たる動機であつたのである。コロンブスによつてアメリカ大陸は發見されたが、その金鑛は政府に獨占され、且つその原住民の狂暴性が傳へられるに及んで、歐洲民衆は著しく期待を裏切られた。そして既に判明せるアフリカ大陸は、素より彼等の求むる理想鄉とは甚だしくかけ離れた存在であつた。彼等の飽なき空想が、マゼランによつて始めて橫斷された廣漠たる太平洋に向けられるに至つたのは當然であつて、爾後マルサス時代までの一聯の航海は、これに到達せんとする、乃至はこれが存否を確めんとする、努力の連續に外ならなかつた。斯かる初期の時代は、興味の中心は未知の島嶼の發見と延いてその占有といふことであつて、學術的調査乃至開發は未だ殆ど問題とされなかつたのである。マルサスが最も利用したクック航海記は、謂はゞ學術的調査

の先驅とも見られるが、眞のそれは、恐らくは一八一五年ロシアのロマンツォフ伯爵によるルーリック號の巡航であらう。この船には、その後浪漫派の文學者として名聲を謳はれたシャミッソーが動植物學者として參加し、數々の業績を殘してゐる。一八三一年にはダーウィンがビーグル號に搭乘して南海に出發した。彼がその進化論の着想をマルサス人口論に得たことは、人の知るところである。要するにマルサスの利用し得た南海の記錄は、略々クック時代のそれであつて、その不備なることは言を俟たない。主題に入るに先立つて、當時までの主たる航海を略記し、この間の消息を覗ふであらう。

一四八六年、バソロミュー・ディアズは喜望峰を發見し、九二年にはコロンブスがサン・サルバドル島に到着した。九七年、ヴァスコ・ダ・ガマは喜望峰を廻つて翌年印度に到達し、同年コロンブスはその第三回航海によつて南米本土に到着した。一五一三年ヴァスコ・ヌエス・バルボアはパナマ地峽の最高部に達して、遙か東方に一大海洋を目擊したが、これこそ、一五二〇年マゼランが南米南端の海峽（マゼラン海峽）を始めて通過してその船隊を浮べ、太平洋と命名した世界最大の海洋であつた。マゼランはポルトガル人なるに拘らず、仇敵のスペインの爲に南方航路を開かんとし、スペイン王より五隻の船を與へられて一五一九年航途に上り、上記の如く、翌年マゼラン海峽を通過したが、その南岸に毎夜火の燃えるのを目擊して、これを「火の國」（ティエルラ・デル・フェゴ）と名づけた。これは家屋を建てる智慧を持たぬ住民達が、暖をとるための焚火であつた。この島に關してマルサスは、クックの報道を引用して、次の如く言つてゐる。「ティエルラ・デル・フェゴの見窄らしい住民達は人類階段のドン底にあるものと、普く航海者達に認められてゐる。乍併、彼等の日常の風俗習慣に就ては殆ど知られてゐない。彼等の不毛の國土と悲慘な生活狀態とは、彼等との交通を遮斷して、斯くの如き報告を求むるに術なからしめてゐるのである。併し、外貌そのものが、彼等が半ば餓死の境に在るを物語り、寒さに震へ垢と毒蟲に蔽はれ、世にも苛酷な氣候の下に暮し乍ら、其の嚴烈を緩和し生活を多少とも愉快ならしめる便宜品を備へる智慧さへ持たぬ野蠻人の間に於て、人口に對して如何なる障碍が行はれてゐるかを想像することは、格別困難ではない」と。さて太平洋に出たマゼランの次の進路は、香料の寶庫モルッカ諸島であつた。三ケ月餘の難航の後　彼は一群島に到着したが、住民の盜癖に辟易して、これをラドローンズ（Ladrones）と名づけた。盜人島の意味であつて、彼の上陸したのは、今日のガム島と推定されてゐる。マゼランは更に進んで、彼の所謂セント・ラザロズ島、即ち今日のフィリッピンに到つたが、住民の爭鬪に介入して非業の最後を遂げ、一五二二年に約三十名の隊員の乘つたヴィトリオ號一隻が希望峰を廻つてスペインに歸航した。これが最初の世界一周である。ガム島及びフィリッピンについては、マルサスは觸れてゐない。これから約三百五十年後にクックが現はれて、大規模な南海探査に乘り出す迄、數々の航海者がこの廣漠たる南太平洋に散在する諸島を訪れて、珍奇なる報道を齎した。一五六七年にはAlverez de Mendamoがペルーより西航して、ニュー・ブリテン及びソロモン群島に到着したと信ぜられてゐる。一五七七年、Francis Drakeはマゼラン海峽を最初の英人として通過し、カリフォルニアを發見して、これにNew Albionの名稱を與へた。彼は太平洋を横斷し希望峰を迂廻して一五八〇年英國に歸着したが、その間格別の發見はしなかつた。同年出帆したSir Thomas Cavendishはマゼラン一行の航路を辿り、世界周航を完成したが、これ亦大なる成果は收めなかつた。然るに一五九五年、四隻の船を以て出發したAlvaro Mendana de Neyraはメングナ島（後のマルケサス島）、ソリクリー島、サンク・クルーズを發見した。但し一行は最も悲慘な運命に逢着し、その大部分は中途に或ひは死亡し或ひは難破して了つた。

一五九八年 Oliver Van Noort はマゼラン海峡を通過し、同年 Sebald de Wert はセバルディーン諸島即ち今日のフォークランド諸島を發見した。

一六〇五年 Pedro Fernando de Quiros は「南方の未知大陸」の存在を確めんとする明白なる意圖を以て航海に上つたと言はれてゐる。才も彼自身は水先案内となり、指揮は Luis Paz de Torres に委ねられた。彼はその航海に於て二十三の島々を發見したと報告して居り、特に興味あるは、その一つに Australia del Espiritu Santo（聖靈のオーストラリア）のあることである。オーストラリアとは「未知の南方大陸」を意味する空想の產物であつて、而も彼の發見したオーストラリアは渺たるニュー・ヘブライズ諸島中の一島（今日のエスピリツ・サンタ島）に過ぎなかつたのである。曾て新和蘭と稱せられた濠洲がこの名稱を冠せられたのは、一八〇二年以降のことである。なほ指揮者トレスは後にニュー・ギニアと濠洲の間に横はる海峡を通過し、その海峡は今日彼の名稱を以て呼ばれてゐる。

ケープ・ホルン（Cape Horn）の發見者 Spitzbergen は一六一四年和蘭を出帆し、南米の南端を迂廻して最後にニュー・グリテンに到着した。ホルンとは彼の伴つた船の名で――それはまた和蘭の一都市の名前でもある――實際は Hoorn と稱すべきである。四二年には有名な Abel Tasman が南方大陸の發見を目指してバタヴィアを出港した。彼は當時蘭領たりしマウリティウスを經て航路を東南にとり、遂に一つの陸地を發見して、これをヴァン・ディーメンス・ランドと命名した。Van Diemen とはタスマンの後援者たりし時の蘭印總督の名前である。併しその後この名稱は、發見者タスマンに因んで、タスマニアと改稱された。タスマンは次で北東に進航してニュー・ジーランドの兩端に達したが、住民に襲撃されて殆ど上陸すら出來なかつた。船員の多くが殺害されたゝめ、その場所は殺人灣（Murderers' Bay）と名づけられたが、後にクィーン・シャルロット・サウンド（Queen Charlotte's Sound）と改名された。彼は更に北進してニュー・ギニアに至つたが、目的の新大陸を發見することなく、四三年バタヴィアに歸着した。

一六八一年から一七〇三年にかけて Dampier は三度に亘る航海を企て、濠洲・ニュー・ギニア、ニュー・ブリテン及び附近の島々を歷訪したが、十八世紀初期の最も著名な航海は Roggewein のそれである。彼も亦南方未知大陸を發見せんがため、南米南端のル・メール海峡（フェゴ島とスターテン島の間の海峡）を通過して太平洋に出で、間もなく一群島を發見して、これに Labyrinth の名を與へたが、恐らく今日のフレンドリー諸島であつたと考へられてゐる。彼は更にニュー・ブリテン及びニュー・ギニアに至り、次でモルッカ諸島を經て東印度に到達した。この航海に於ては彼の發見したものは、上記のラビリンスの外に、イースター島及びサモア島がある。彼の成果についてヴァン・ルーンは次の如く言つてゐる。「實利的方面から見ると、彼の探檢は何等貢獻するところはなかつたが、間接的には無價値といふわけには行かない。更にもう一度、古い地理學者が抱いてゐた考の間違ひが、即ち南アメリカと未知の南大陸との間には何の關係もないことが明かにされたからだ。探檢の結果は、タスマンや、ダムピールが既に成就したところに少しも新事實をつけ加へなかつたが、なほ、南方大陸の傳說は白人國家の間に根强くひろがつてゐた。一七三九年フランス人ブーヴェ（Lazier Bouvet）が皇帝の命を奉じて南方大陸探檢に出發し、南方に航海したが、たゞブーヴェ島を發見したものみで、行けども〳〵たゞ涯ない大海原で徒らに流氷になやまされ、止むなく出發點に引返すに及んで、傳說の根據は幾分弱められた。それから後、相當の期間探檢は打ちきられ、遂に多くのフランス人やイギリス人によつて、南方大陸こそ、ジァヴァとニュー・ジーランドの間に横はる巨大なる島に他ならぬことが明かにされたのである」と。こゝに言ふフランス人及びイギリス人とは Bougainville, Wallis 及び特に

James Cook 等を指すこと勿論である。

マルサス以前に於ては勿論、その以後を通じても、南海の事情を闡明するに與つて最も力のあつたのは James Cook (1728-79)であらう。マルサスがクックの航海記を最良の典據としたのは當然であつて、マルサスの南洋記はクックのそれに他ならないと言つても過言ではない。周知の如く、クックは一七六八年から七九年の間に三回に亙る航海を企て、それまで未知のまゝに取殘されてゐた幾多の地方を歴訪し、同時に英國に廣大な新領土を齎らすに至つたのである。一七六八年、彼は Royal Society の企てた天文觀測隊の指揮者に任命され Endeavour の船長として英國を出帆した、南米の南端を通り、フェゴ島に寄港して、觀測目的地タヒチ島に到着したのは翌年四月であつた。觀測終了後、彼は今猶ほその存在を信ぜられてゐた南方大陸の存否を確かめんとして航海に上り、ソサイエティー諸島を窮めたる後、ニュー・ジーランドに至り、六ケ月に亘つて調査を續けた。この島が南北二島より成り、その中間に一海峽(クック海峽)の横はることが明かにされた。併し島内の事情を闡明することは、住民の敵意に遭つて、不可能であつた。次で彼はニュー・ホランドに進航し、東岸一帶を調査して、この地方に New South Wales の名稱を與へると共に、これを英領に編入した。英國の濠洲制覇はこゝに端を發し、二十年後の一七八八年一月フィリップが七百五十人の囚人をつれてボタニー灣に入港し、二月シドニーに於て植民地宣言を行ふことによつて英領植民地濠洲の誕生を見たのである。クックはそれよりトレス海峽を通過し、ニュー・ギニアが濠洲の一部に非ざることを確めて、バタヴィアに到達し、七二年七月希望峰を廻つて英國に歸着した。翌七二年、彼は再び南海の再調査を命ぜられ、Resolution 及び Adventure の二隻を以てプリマウス港を出帆した。今回は逆に希望峰より東南に航路をとり、南極圏を迂廻してニュー・ジーランドに到達したが、その間何物をも發見し得なかつた。ニュー・ジーランドを出帆してから、廣大な海面を縦横に走破して、未知の大陸を求めたが、結局かゝる大陸の存在せざることを確認せざるを得なかつた。更に彼は曾てロッゲワインの發見したイースター島を、次でマルケサス及びフレンドリーの兩諸島を精査し、一旦タヒチに歸航してから。中央太平洋を横斷して、曾てキロスが「聖靈の南の國」と名づけた一群島に到着して、これにニュー・ヘブライズの新名稱を與へた。更にニュー・カレドニア其他を發見した後、再びニュー・ジーランドを訪れ、いよ〳〵歸航の途についたが、その際濠洲とフェゴ島の中間に、世人の想像せる未知大陸の存在せざることを明かにしたのである。一七七五年七月、即ち丸三年を費して、彼は英國に歸着したが、この航海に於て走破せる距離は莫大に達し、希望峰から再び希望峰に歸航するまでに既に二萬リーグ、即ち赤道の三倍に近い距離を走つた。當時として如何に大航海なりしかは容易に想像しうるのであつて、就中從來の大航海が常に壞血病その他による多數人命の損失を免れなかつたに比し、彼の「レゾリューション」號は僅か一名を失つたに過ぎないことは、一層クックの名聲を高める所以であつた。

クックの第三航海は大西洋と太平洋を繋ぐ北方水路を探すためであつた。一七七六年六月、彼は Resolution 及び Discovery の二隻を以てプリマス港を出帆し、希望峰、タスマニアを經てニュー・ジーランド及びソサイエティー諸島に到つた。タヒチに數ケ月滯在した後、航海の目的たる北方に向ひ、一群島を發見し、彼にこの航海を命じた海軍大臣に因んで、サンドウイッチ群島と名づけた。この名稱は約二世紀間用ひられた後、いつしかハワイと改名されたのである。(この島の眞の最初の發見者は十六世紀のスペイン人と言はれてゐるが、文明國にこれを紹介したのはクックである)。クックは次でカリフォルニア沿岸を北上して、曾てベーリングが活躍した北方水域に達したが、途中ヌートカ・サウンド(Nootka Sound)その他を發見した。この地については、マルサスに次の記事がある。「アメ

リカ北岸に赴いた最近の航海は、蠻人生活に於ける頻々たる困窮の如上の報道を肯定し、又概して自然が自ら最も豊富な食物を齎すと思はれる漁業なるものが、實は頗る當てにならぬものであることを示してゐる。ヌートカ・サウンド近海は住民を寄せつけぬほど結氷することは、殆ど或ひは全くないと言つて好い。而も住民が細心の注意を以て冬の備へを爲し、耐寒の食物を片ツ端から用意し貯藏する事實を見れば、冬の漁業は絶望なことが明かである、云々」と、クックは進んでベーリング海峽に達し、そのアジア側を調査したが、これを通過して大西洋に出ることは出來ず、一旦ハワイに立戻つたが、一七七九年二月、ケアラケクア灣に於て蠻人に襲はれ、不慮の最後を遂げてしまつた。併し彼が三度びの大航海に於て得た結果は極めて大なるものがあつた。「南方の未知大陸」が單なる想像の産物に過ぎぬことが明かにされた許りでなく、それまで殆ど又は全く知られなかつた多くの島々を、或ひは發見し或ひは再發見し、民情を尋ね水路を開き、大なる程度に南海の謎を解き得たのである。

四、マルサス人口論に現はれた南海諸島

南海諸島に關するマルサスの記述は、殆ど第一編第三章及び特に第五章に見出される。第三章は「人類社會の最低階段に於ける、人口に對する障碍に就て」と題され、フェゴ島、ヴァン・ディーメンス・ランド、アングマン群島、及び特に新和蘭に關する報道を傳へてゐる。フェゴ島の記事は既に掲げたが、次のヴァン・ディーメンス・ランド即ちタスマニアの住民に就ては、マルサスは單に、フェゴ島住民に次で「才能も智慧も殆ど之に劣らず低い」と記してゐるだけである。そしてスマトラの北方、ベルガル灣に散在するアングマン群島については、マルサスはフェゴ島及びタスマニアの記事に續けて曰く、「然るに最近の報道は、東方のアングマン群島に更に慘めな蠻族が棲息してゐると傳へてゐる。航海者達が蠻人生活に就て物語つてゐる如何なる事柄も此の民族の蠻風には到底及ばないとの事である。彼等の凡ゆる時間は、食物の捜索に費されてゐる。森には動物は殆ど或ひは全く棲息せず、食用植物も僅かであるから、彼等の主たる仕事は、或ひは岩石を攀じ、或ひは岸邊を徘徊して、當てにならぬ魚類を捜す事であるが、それも荒天の季節には、屢々草臥儲けに終つてしまふ。身長は五呎を越ゆるは稀で、腹部は膨脹し、肩を尖り、頭は大きく、手足は不釣合に細い、顏貌には極度の慘苦、飢餓と殘忍の物凄い交錯が刻まれてゐる。其の窶れ果てた姿態は、健全な榮養分の不足を如實に示してゐる。海岸には、今や餓死せんとする不幸なる輩も見受けられた」と。マルサスの所謂最近の報道とは、サイム氏のアヴァ紀行(Syme-Embassy to Ava)を指すが、この島ほど、舊くからその存在の知られ乍ら、その内情の知悉されなかつた島は餘り類がない。一七八八年から翌年にかけて、ベンガル政廳はこゝに囚人植民地を建設する目的で Colebrooke, Blair (註) の兩氏を派遣し、後者は一七八九年チャタム島に始めて植民地を開いた。併しその怖るべき高死亡率によつて、七年後にはこの植民地は他に移されるに至つた。マルサス時代には、こゝの島民は依然「人を生き乍らにして喰ふ」最も無殘な蠻人と考へられてゐたのである。併し今猶ほ甚だしき未開狀態に在ることは、我國の占領と共に理地報道として既に傳へられて來た。

（註）最近我軍に占領されたポート・ブレア(Port Blair)は、彼に因んで命名された最大最重要な港である。

これら最低階級の次には濠洲卽ち當時のニュー・ホランドの住民が置かれてゐる。既述の如く、英國がこゝに植民地を開いたのは一七八八年であるから、マルサス時代には、この大陸は殆ど全く原住民のみの世界であつた。マルサスは主としてコリンスの「ニュー・サウス・ウェールス記」(Collins-Account of New South Wales)に據つて、この原住民の悲慘な生活狀態を描寫してゐる。例へば蠻人は蛆蟲を食つてゐるとか、羊齒の根と蟻とを搗き混ぜた團子を常食とするとか記した後で、甚だ素朴な掠奪結婚、婦女虐待、殺兒の風習を傳へ、人口減退の斯かる有力な原因

の下に於ては、吾人は、人口の稀薄な土地に動植物のみは増加するであらう、また之は岸邊から採れる魚類と相合して、住民の消費量を超過するであらう、と當然想像したくなる。併し全體として見れば、人口は概して食物の平均供給額の水準に近接して居つて、隨つて荒天其の他の原因から少しでも食物に缺乏を來せば、忽ちに困窮を惹起する惧れがある」と論じ、狂暴なる積極的障碍の下に於ても常に生活資料の水準を突破せんとする人口増殖力の優勢を示さんとしてゐる。

人類階段の最下層として如上の諸地方を述べた後、マルサスはその第五章に於て、南海に散在する幾多の島々を檢討してゐる。先づニュー・ギニア、ニュー・ブリテン、ニュー・カレドニア、ニュー・ヘブライド等の諸島については、これら「巨島の內情は詳かでない。恐らく彼等の社會狀態は、アメリカの幾多蠻族間に行はれるそれと酷似してゐるであらう。斯かる島嶼には異る數々の種族蟠踞し、相互の鬪爭に寧日なきが如くである。酋長の威令は行はれず、財產も隨つて不安定であるから、斯かる地に於ては、食糧が豐富となつた例しは殆ど無い」とのみ記されてゐるに過ぎない。ニュー・ギニアは十六世紀に發見され、爾後著名な航海者にしてこれを訪れたものは極めて多いが、當時は和蘭の妨害によつてその內部事情を知ることは困難であつた。調査が本格化したのは、十九世紀後半モレスビー（註）が現はれてからである。ニュー・カレドニアはクックが愈く一七七四年に發見したばかりであるから、一八〇〇年前後には殆ど何事も知られてゐなかつたわけである。（この島は一八五一年佛領と宣言され、當時のポール・ドゥ・フランはヌーメアと改稱されて首府となり、以て今日に至つてゐる）。

（註）ポート・モレスビーは彼の名を記念する港である。

次でマルサスはニュー・ジーランドに移る。クックの努力によつて、この島の事情は可成り判明してゐるが、「それとても住民間の社會狀態に關し、吾人に快き印象を與へるが如きものではない。船長クックがその別々の三航海記に描寫した該島の光景は、人類の歷史の各頁に遭遇する最も陰慘な暗影の幾許かを示してゐる。斯かる人民の異る種族間に存する不斷の確執は、アメリカの如何なる蠻族間に於けるよりも更に甚しく、彼等が人肉を、而も好んで、喰ふ風習を有することは、疑問の餘地なき事實である」。マルサスはクックの體驗を轉記して、窮民相互の敵視狀態を傳へた後、「余（クック）自らの觀察に依り、またクウェーハルーアの報告に依れば、ニュー・ジーランド人は相互に敵の來寇を惧れて絶えず不安の裡に生活するものゝ如くである。蓋し、正しく彼等の考へるが如く、未だ曾て他種族の侵害を受けざる種族は殆ど皆無であり、隨つて絶えず復仇の機を覬覦してゐるからである。また恐らく談食に對する願望は尠からざる刺戟であつて、……この戰慄すべき計畫を實行する方法は、先づ夜陰に乘じて敵に忍び寄り、油斷を見澄し、――尤も斯かる好機は容易に捕へ得るものでながらうが――幼老男女の差別なく鏖殺するのである。虐殺が首尾よく終れば、或ひは現場で酒宴を催して貪り喰ひ、或ひは死屍を滿載して凱旋し、家庭に於て筆紙に盡い殘酷な喰ひ方をするのである」と說明してゐる。彼は斯くこの島に於ける人口に對する障碍として、戰爭による人命喪失を擧げた後、論じて曰く「婦人が人口增殖に不利な何等かの習慣を實行しつゝあるか否かは不明である。よし斯かる習慣があるとしても、是等は異常な艱苦の秋でなければ、恐らく實行される事は無いであらう。蓋し各種族は、攻防の力を大ならしめんとして、自ら其の成員の增加せんことを希望するであるからである」と。

ニュー・ジーランドの住民は久しくその狂暴を以て知られ、タスマンが一六四二年始めてこゝに寄港したとき、既に一言した通り、船員の一部は忽ち土人に殺害され、タスマンはその地を殺人灣 Murderers Bay と命名して急遽

立去つた。後にクックはこの地に上陸する必要に迫られたとき、四人の土人を殺さゞるを得なかつた。これは慈愛心に富める彼にとつては、前例のない出來事であつて、土人の狂暴性を物語る何よりの證據と見られやう。併し十九世紀に入つて英國宣教師が入り込むと共に、彼等も次第に馴制されて、殊に一八四〇年英國植民地となつてからは、全く歐洲人に壓倒され、今日では全人口百六十萬のうち、土人は五萬前後を數へるに過ぎない。

併し當時の南海諸島と雖も、必ずしもその全部が悲慘な鬪爭と喰人に終始してゐたわけではない。一部の島嶼は遙かに平穩な生活を送り、これは寧ろ誇張されて歐洲人に傳はり、恰も極樂の如く喧傳されたのである。マルサス曰く「人煙稀なるニュー・ジーランドより眼を轉じてオタヒート（即ちタヒチ島）及びソサイエティー諸島の人口稠密なる海岸地方を眺めれば、別趣の光景が吾人の前に展開される。豐饒なることヘスペリデスの園（註）の如しと謳はれることの地方は、一見窮乏の憂ひは影もなきが如くである。」と。併し彼は反問する。「幸福と豐饒とは常に最有力な增殖原因と見做されてゐる。然らば氣候が快適で、疾病は稀に、且つ婦人は毫も苛酷な苦役に惱まされない地方に於ては、是等の原因がより不利な地方の比肩すべからざる猛威を以て作用せぬ筈があらう乎。而も若しそれが作用したならば、人口は爾く狹隘な限界内の何處に餘地と食物を發見し得るであらう」と。そしてクックは周回四十リーグに充たないタヒチ島の人口が二十萬四千に達するを見て驚愕したが、「この人口たる、いま假りに倍加期間を二十五年とすれば、僅々一世紀間に三百萬を突破することになるが、その曉、この夠しい人員は抑も何處に處分され得るであらう。他の島嶼と雖も矢張り同樣であらう。即ち一から他に移ることは、單に場所の變更に止まり、艱苦の種類の變更とはならぬ。島嶼の地位と住民の航海狀態を以てしては、有效な移住、或ひは有效な輸入の如きは、全く絶望である。……この諸島の民が引續き二十五年毎に倍加しなかつたことは、些の疑問をも許さぬところである。隨つて彼等の社會狀態の研究に移る前に、吾人は不斷の奇蹟が婦人を不姙にしてゐるのでない限り、人口に對する或る極めて有力な障碍は、住民の習慣のうちに求め得るといふことを確信せねばならない」と論じてゐる。

（註）ヘスペリデス（Hesperides）の園とは希臘神話に現はれたユートピアである。Hera が Zeus と結婚したとき、Gaa（Chaos の長女）は黃金の林檎を贈つたが、その守護に當つたのが、Atlas と Hesperis との間に儲けられた三人の娘（四人又は七人とも言はれる）である。Hesperides とはこの娘達を指す。Hercule はこの林檎を守る百頭の龍を殺して林檎を獲得し、以てその十一番目の苦業を成就した。

然らば人口增殖を妨げる如何なる習慣が見出されるかといふに、マルサスはクックに從れて、亂交と殺兒とを擧げてゐる。そしてこの習慣の普及を、彼はアーレオイ結社なるものゝ責任と解してゐる。即ちタヒチ及び附近諸島に關する數次の報道に據れば、「最近文明諸國民を大いに驚愕せしめたアーレーオイ結社の存することは疑ふべくもない。彼等は既に幾度となく傳へられるところであるから、玆には單に、亂交と殺兒とが彼等の基本法則たるの觀ある一事を指摘すれば充分である。彼等は全く上流階級より成り、……この淫佚なる生活方法は彼等の心より欣ぶところであつて、容姿の優れた男女は、最も野蠻な種屬すら猶且つ恥とする不埒な行爲を續けて青春時代を送つてゐる。……アーレーオイの婦女が分娩すれば、水に浸した布片を產兒の鼻口に當てゝ之を窒息せしめる。クック曰く、斯かる結社が、之を構成する上級階級の增殖を甚しく防遏しつゝあることは確實である、と。此の觀察の眞實なることに就ては、疑ひの餘地がない。マルサスのこの一節を讀めば、右の結社は恰も罪惡倶樂部たるの印象を受けるが、實際は必ずしもさうではないようである。大英百科辭典に從へば、Areoi 又は Areoiti とは、タヒチ島に淵源し、後に他の南太平洋諸島に傳つた秘密結社で、男女共に入會を許される。元來宗教的性質を帶び、會員は自

らポリネシアの神 Oro-Tetifa の後裔と稱し、七つ又はそれ以上の階級に分たれ、各々特有の入墨をもつてゐる。宗教上の主目的は、自然の發生力を敬拜することである。併しこの結社はまた大なる社會的勢力を有し、總てのものゝ共有を主張する。婦人會員は共有財産で、同棲期間は三日と定められ、また子を生めば直ちに殺害する義務がある。尤もその子供が僅か三十分生存することを許されたときは、救命される。子供を生かして置く爲には、母は敢へてこの子供を引とる男性會員を探さねばならぬ、等々。即ちクック又はマルサスが亂交と斷じたものも、その社會では普通の行爲に過ぎない。マルサスは「クックはオタヒートの婦女を、餘りも甚だしい淫亂の汚名から救濟せんとする特別の努力の中に、右の習行が此の地方に於て別して猛烈なことを承認し、同時に、斯かる行爲に出づる婦女と雖も、これがために毫も社會上の地位を墮されることなく、最も素行正しい婦女と混在しつゝあると述べ、以て最も決定的な評言を下してゐる」と記してゐる。

亂交による不姙と相俟つて、殺兒の習慣は素より人口增殖を妨げる筈であるが、マルサスは一般に寧ろその逆を信じてゐる。これはヒュームに於ても亦然りであつて、その理由は、殺兒の許可は家族過多に陷る憂ひを一掃し、隨つて結婚は增加し、而も兩親は、極端な場合を除けば、我子の愛に惹かされて、斯かる殘忍な行爲に出づるを得ないからだといふのである。斯くてマルサスは「オタヒート及び附近島嶼に於けるアーレーオイ結社の流行は、之を一除外例たらしめるであらう。此の習慣は多分こゝでは反對の傾向を帶びてゐる」と言つてゐる。

斯くてタヒチ島の「社會狀態から生ずる人口に對する障碍は、これのみを以て、最も快適な風土、最も繁榮な豐穰の效果を相殺するに充分」と考へられるが、實はこれが總てゞはない。至極平和の裡にその日々の流れてゆくと思はれたこれら地方に於ても、「異る島嶼の住民間の戰爭及び內紛は頻發し、時として極めて破壞的に行はれる。戰場に於ける人命の浪費以外に、征服者は概ね敵領を劫掠し、豚・家禽を屠殺掠奪し、能ふ限り將來の生活資料を減少せしめる。オタヒート島は一七六七年及び六八年の兩年には豚と家禽とに溢れてゐたが、一七七三年（註）には是等の鳥獸の供給は甚だしく不足となり、殆ど何物を以てしても之を所有者から購ふことは困難であつた。此の主たる原因は、船長クックに從へば、右期間に勃發した戰爭に在る。船長ヴァンクーヴァーがオタヒートを訪問した際、氏は「七七七年に袂別した知人達の大部分の既に此の世を去つたこと、爾後數次の戰爭が繰返へされ、其の際オタヒート西部の酋長等が敵に合併したこと、並びに王は久しく全く勢力を失墜し其の所領は全く荒廢に委せられたこと等を知つた。船長クックの遺して置いた動植物は戰亂の爲に概ね失はれてゐた」。

（註）この年號は拙譯には一七六三年とあるが、それはワード版に據つたゝめの誤謬である。これを指摘して下すつた南亮三郎教授に感謝の意を表明したい。

是等の原因によつて、オタヒートの人口は現在に於ては生活資料平均額の餘程以下に抑止されてゐるやうであるが、而も此の現狀が久しく持續するものと斷言することは早計であらう。船長クックは此の島を訪れる每に其の狀況の變化を認めたが、之は其の繁榮と人口とが著しく動搖しつゝある證左たるものであらう。そして吾人も亦理論上正に斯く推定せねばならぬ。即ち吾人は、是等諸島の何れかの人口が、過去久しきに亘り、一定數に停滯してゐたとも、或ひは又如何に緩慢にせよ、一定の速度を以て規則的に增加し得たとも想像するを許されないのであつて、必ずや大なる波部を續け來つたに相違ないのである。人口過剩は常に蠻人の生來の好戰心を助長するであらう。また此の種の侵略に依つて醸成される怨恨は絕えず慘禍を擴大し、戰爭の要因となつた最初の事情の既に消失した後と雖も、依然流血の慘事を續けたであらう。人口稠密な社會は、平常節約に節約を重ねて、而も食物の限界に切迫

しつゝある。隨つて一兩度の凶作に依つて打擊を蒙るときは、殺兒と亂交の弊更を甚しきを加へ、這般の人口減退の原因は、又右と同じく、之を深刻ならしめた事情の既に終熄した後も、暫くは更に旺盛に其の作用を續けるであらう。併し環境の變化と共に、習慣も除々に或る程度まで變化し、人口は幾許もなく舊に復するであらう。そして最も極端な暴力の加へられぬ限り、久しくその自然的水準以下に停滯することはあり得ない。歐洲人との接觸が、オタヒートに於て、幾許の程度まで此の極端な作用をなして元の人口への復歸を妨害するであらうかは、獨り經驗の能く決定し得るところである。」

然らば爾後の經驗は果して何を示したであらうか。今世紀初頭の同島人口は僅々一萬人强に過ぎない。クック當時の計數を若し眞とするならば、一世紀半にして二十分の一に激減したことになる。南太平洋に散在する廣大な佛領、即ちニューカレドニア、ツブアイ、マルケサス、パウモツ、及びソサイエティーの諸島は、今日（一九三八年）ではその全人口を合しても僅か十萬を數へるに止まる。歐洲人との接觸が殆ど到るところに於て原住民を滅亡に導くことは、疑ひの餘地なき事實であつて、初期の殘虐なる殺戮、それに續く狡猾なる去勢手段は、原住民の減少とその活力の減退を招致せざるを得ない。タヒチ島の住民は、その容姿と均衡の優れたる點に於て、世界無比と稱せられ、特に婦人の美貌は南海の神秘とさへ考へられてゐるが、懶惰と無氣力は、また定評がある。往時小舟を操つて遠くニュー・ジーランドまでも遠征したと謂せられる祖先の面影は、いまは求むるに由もないといふ。斯かる事實を顧るにつけ、こゝにも今後の我國の南方政策に課せられた大なる使命を感ぜざるを得ない。

他の諸島の事情は、餘り詳かでないといふ理由で、記述は極めて簡單である。フレンドリー及びサンドウィッチ兩群島に於ては、タヒチ島に於けると同樣の封建制度と封建的擾亂、酋長の法外な權力と下層階級の慘狀、又は住民の大部分の間に蔓る略々同一の亂交等が發見されると記され、酋長の下層民に對する横柄な態度を示す若干の實例が引用されてゐるが、「殺兒の風習及びオタヒートのアーレーオイ結社に類する制度は存在して居らぬやうである。併し疑ふべからざる典據に照して、賣淫の風は遍く瀰漫し、下層階級の女の間に大いに行はれつつあるが如くであつて、斯かる風習は常に人口に對する最强力の障碍として作用せざるを得ない。また生涯の大半を酋長に捧げる toutous 即ち僕婢が、屢々獨身に終ることは素より大いにあり得べきところであつて、また上流階級に許された多妻制度が、劣等階級の間に於ける亂交の罪惡を大いに誘發助長する傾きあるは明かである」と論じてゐる。他の島々、例へばイースター島、マリアナ群島、臺灣等に關しては、記述は一層簡單である。要するに「是等島嶼の產物は、時には頗る潤澤となる事もあり、また時には無智・戰爭其の他の原因に依つて頗る減少する事もあるが、平均人口が概して平均食物の限界に猛烈に切迫しつゝある事は疑ふべくもない」のである。

新たに發見された地方については、明暗の何れかの面が誇張されて傳へられ、吾人の想像力は更にこれに尾鰭をつけて、或ひは地獄の如き暗黑世界と判斷し、或ひは反對に極樂の如き理想鄕を想定するに至るものである。初期の航海者達は南洋の原始民族から、時には殘忍な迫害を蒙り、また時には王侯の扱ひを受けたといふから、相反する二つの南洋觀が世人の腦裡に植えつけられたのは當然である、マルサスは、その主題の性質から、努めて暗黑面に注意を凝集し、時に行はれる反對の觀念を打破せんとした。例へば次の一節がある。曰くについては、マルサスは次の如く記してゐる。「世に傳へられる南洋土人の鼓腹擊壤の極樂生活なるものは、畢竟世人が、是等の樂天地に就て時に齎される夢の如き物語に眩惑されて、想像の翼を驅り過ぎた結果であると考へたい。そして吾人は……南洋の最も豐饒な島嶼すら、猶且つ吾人の想像するが如き無憂の天地に非ざる事を悟つたのである。布教航海記に據

れば、パンの樹の實らぬ季節には、誰しも一時的窮乏に惱み、マルケサス群島のオベイタフー島に於ては、之は飢饉の域に達し、動物すら食物の缺乏に苦しめられた」云々。

五、マルサスの一般的結論

南海諸島その他の原始的社會をマルサスが特に採りあげた主たる目的は、既に述べた通り、これを文明社會と對比することによつて、彼の所謂積極的障碍がこれら社會に於てより優勢に作用しつゝあることを實證せんとするに在つた。併し彼はこれら二つの社會の相違をば、また別の觀點から指摘して居るのであつて、マルサスの文明觀又は道義觀は、その論旨の内に極めて明白に表明されてゐるのである。曰く、「野蠻生活なる名稱下に總括される斯かる社會の概論を終るに當つて、余は斯かる生活が文明生活に優る唯一の點は、民衆が遙かに大なる餘暇を有する一事であると謂はざるを得ない。爲すべき仕事が尠いから、隨つて勞働も亦尠いのである。文明生活に於て下層階級の運命づけられてゐる不斷の苦役を顧る時、右は羨望に堪へざる長所である。然るに事實は、遙かにより大なる短所が之を相殺して恐らく猶ほ餘りあるのである。容易に食物を獲得し得る是等の國々に於ては、最も壓制的なる階級別が行はれ、財産の爭奪侵害は當然の事とせられ、下層階級は文明國民の間に於けるよりも遙かに甚だしき階級的蔑視を蒙りつゝある。高度の平等行はるゝが如き野蠻生活に於ても、食物獲得の困難と、絶えざる戰亂の慘苦とは、文明社會の下層民の果す勞働に毫も劣らざる苛酷の勞働を必要ならしめる。唯だ文明社會に於ては、其の苦役の分配が遙かに不平等なだけである」と。マルサスは更に續けて言ふ。「唯だ吾人は人間社會の是等二階級の勞働を比較することは出來ても、兩者の困憊苦難に至つては、之を比較すべき術は無いであらう、惟ふにこれを明かならしめるものは、亜米利加の劣等蠻族間に行はれる教育の全體の調子に如くものはない、最酷の苦痛と不幸とに處すべき鐵石心の涵養に役立つ一切のもの、心情を冷刻ならしめ凡ゆる憐憫の情を狹隘ならしめるに效果ある一切のもの、是等は蠻人が諄々縷々として吹込まれるものである。反之、文明人は、勿論一旦不幸の來た場合には忍耐して之に堪へよとは訓へられるが、蠻人の如く、常に之を期待せよとは訓へられて居らぬ。剛毅以外に幾多の德が實踐されねばならぬ。彼は惱める隣人を、否敵人をすらも憐むべきこと、社會的愛情を涵養し擴大すべきこと、及び一般に快き情緒の範圍を擴大すべきこと等を訓へられるのである。此の異る二つの教育法から求められる明白な推論は、文明人は悅樂を待望し、野蠻人は單に苦難を期待するといふことである」と。